

就園前親子への音楽活動による支援の可能性 —大学附属幼稚園の役割をふまえて—

松本 晴子¹

大学附属幼稚園には、本来の幼稚園教育の実践をはじめ幼稚園教諭育成のための教育実習機関としての役割や先進的な幼稚園教育の実践や地域の子育て支援活動への取り組みなどが期待されている。

本稿は大学附属幼稚園の役割について若干の考察を行い、本学附属幼稚園といくつかの大学の附属幼稚園で実施している地域子育て支援活動の実態を概観した。また本学附属幼稚園で開催している「ぼっぼくらぶ」で筆者が行った音楽活動の実践を検証した。その結果、就学前親子への音楽活動のひとつの可能性が示された。

Keywords : 大学附属幼稚園の役割、就園前親子への支援、音楽活動

1. はじめに

大学附属幼稚園には、本来の幼稚園教育の実践の他に、学生の教育実習機関としての役割をはじめ、大学学部の高度な専門研究との連携による理論と実践の推進、地域の幼児教育従事者への情報提供、子育て支援活動に寄与する役割など積極的で多様な取り組みが期待されている。

本稿は、大学附属幼稚園の役割と地域の子育て支援活動について、以下の2つの視点からの若干の考察を試みるものである。1つは、本学と我が国のいくつかの大学の附属幼稚園で実施されている地域子育て支援活動の実態を概観し、大学附属幼稚園の役割を音楽活動にかかわる視点から考察する。2つめは、本学附属幼稚園の子育て支援活動として開設されている「ぼっぼくらぶ」において試みた音楽活動の1つの実践を検証する。

2. 大学附属幼稚園を選択する理由

我が国の就学前の子どもの教育については、幼稚園にしる保育所にしる、それらのいずれかを受けさせなければならないという保護者に負わされ

た義務はない。このことから、保護者の考え方や生活環境などによって、子どもが初めて所属することとなる社会的な組織としての幼稚園や保育所の選択は自由で、極めて恣意的である。

ところで、保護者はどのような理由によって、大学附属幼稚園を選択するのであろうか。少なくとも次のことが考慮されていることが推測できる。

第1に、大学附属幼稚園が持っている保育、教育の質の高さへの期待である。その高水準は専門的な研究や多様な実践研究に取り組んでいる大学と連携することで初めて可能となる。このことは、我が国の幼児教育が混沌とした現状にあるからこそ、保護者として幼児教育の最新動向を知る機会や子どもに魅力的な教育実践を体験させることができるのではないかという希望と期待を抱かせることになっているといえよう。大学の教育実践研究の場として、これまで本学の附属幼稚園は、発達臨床学科はもとより複数の学科とかわってきており、今後ますます両者の連携が深まることが望まれる。更にこれからの可能性として、異文化交流の体験という観点から国際文化学科や英文学科との連携や、アウトドア環境教育という観点から生活文化デザイン学科との連携なども考えられる。

第2に、大学附属幼稚園では学生の教育実習の

1. 宮城学院女子大学発達臨床学科

場として多くの機会を有することから、幼稚園教諭以外の成人（学生）とのコミュニケーション力の幅が広がることへの期待である。核家族が増え、しかも兄弟姉妹が少なく隣り近所との付き合いが希薄になっている家庭の子どもにとっては親以外の大人とのふれあいが決して多いとは言えない。幼児期の遊びを通しての学びや気付きが、子どもの心身の成長には欠かせないものであることをふまえるとき、子どもにとって学生との出会いや様々な形でのコミュニケーションの経験が多いことは、社会的な力を身に付けていく第一歩と考える。幼稚園の担任教諭とは異なった学生とのふれあいは、子どもの心身にゆとりをもたらす大きな意義が見い出されるだろう。

第3に、大学附属幼稚園では幼稚園から大学まで同じ教育理念や方針に基づいた一貫教育が受けられるのではないかという期待である。大学附属幼稚園の場合、本学のように幼稚園・中学校・高等学校・大学、あるいは幼稚園・小学校・中学校・高校・大学までそろっている場合など、同じ一貫教育といってもその実態は様々であるが、いずれにせよ附属幼稚園が大学教育にまで直接につながっていることへの期待は大きい。

第4に、保護者の出身大学の附属幼稚園であること、または保護者自身がその附属幼稚園の出身であることからの選択もありうる。

第5に、家から近いなど子どもを通わせるに便利であることから選択される場合である。

これら5つに加えて、大学附属幼稚園が地域の子育て支援活動に積極的に関わるようになってきていることから、子供の両親の目を大学附属幼稚園に向けさせる一つの要因になっているようにも思える。

3. 大学附属幼稚園の教育と地域の子育て支援

子育て支援には、①子ども自身の成長や発達を支える子育て支援。②親として育つことを支える親育ち支援。③育ち、育てあう親子関係を支える親子関係支援。④親と子の育ちを支える環境づく

りを支援する子育て環境支援の4相がある¹⁾とされる。本稿ではこのことをふまえつつ、立石らが子育て支援について①預かり保育、②子育て相談、③就園前の親子への支援と設定し「幼稚園における子育て支援の実態調査」²⁾を行っていることを参考にし、大学附属幼稚園の教育活動の一環として就学前の親子への支援をいかに行うかについて検討することとしたい。

本学の附属幼稚園においては、1996年度から地域の保育・幼児教育センターとしての役割を鑑み、畑山みさ子を中心となって地域開放行事として未就園児のための親子教室「さくらんぼ広場」を開催しておりその取り組みが報告されている^{3)~7)}。またさらに次年度に本学附属幼稚園に入園する予定の未就園児親子通園クラス「ぼっぼくらぶ」を2005年度から開設し、新しい試みが着実に根付いてきていることも報告されている^{8)~10)}。

他の大学附属幼稚園を見てみると、本学で行われている地域開放行事の「さくらんぼ広場」とほぼ同様の地域子育て支援活動が数多く行われている。それらの子育て支援活動の内容は、次の3つに大別される。

1つは、園庭の開放である¹¹⁾。仙台市内のM大学附属幼稚園¹²⁾、東京都内のG大学附属幼稚園¹³⁾、O大学附属幼稚園¹⁴⁾、秋田のA大学附属幼稚園¹⁵⁾などでは親子で砂場や遊具などで自由に遊んでもらうサービスを提供している。しかしS大学附属幼稚園¹⁶⁾のように附属幼稚園修了生のみ限定した園庭開放もある。

2つは、製作活動や手遊び活動などの遊び活動の提供である。概ね幼稚園教諭が支援にあたっているがボランティア学生の支援も行われている。

3つは大学教員が担当する講話である。千葉県S大学附属幼稚園¹⁷⁾は大学教員による講話を10回シリーズで企画し無料公開で力をそそいでいる。このように地域の状況や保護者の希望などによって、多少の違いはみられるものの就園前の子どもを持つ親、特に母親の子育てを支援しようという試みは着実に広がってきている。

4. 就園前親子への支援のなかでの音楽活動

上記のような3つの支援の形とは別に、音楽活動を主軸にした支援についてはどうかといえば、就園前の親子支援のなかで行われている主な音楽活動の中でもっとも多いのが、リズムを取り入れたものである。K大学附属幼稚園¹⁸⁾ではカスタネットを使った遊び、親子リズム遊び、Y大学附属幼稚園¹⁹⁾では親子リズム体操が行われている。リズム遊び、リズム体操というテーマから、活動のねらいと実施されている活動内容が異なることは推察されるが、就学前の親子でいっしょにリズムを楽しむ活動が設定されていることは幼児期の発達とリズム感の育ちの関係から、適切な実践であると考えられる。幼児期にリズム感を育てる大切さは、幼児教育が文部省(当時)の指導要領に加わることになった昭和22年の『保育要領』の保育内容に「音楽」とは独立して「リズム」の項目が設定されたことに遡ってみても理解でき大切なことである。リズムに反応する楽しさを体験しながら、合わせて身の回りの音を注意深く聞いたり、感じ取ったりする力が備わっていくことができれば、子ども自身はもとより父母にとっても情緒的発達の一翼になることである。

前述のO大学附属幼稚園は、音楽大学の附属幼稚園ということもあり、親子リズム遊びの他に歌遊び、親子コンサートが行われている。ただしこのような活動内容が、音楽大学附属幼稚園であればどこでも地域に公開されているものではないことから、O大学附属幼稚園が示している地域に根差した保育の環境づくりの方針を明確に実践していることを汲み取ることができる活動内容であるといえよう。

次に本学の「ぼっぼくらぶ」で筆者が行った音楽活動の実践例を検証しながら、この問題についての若干の考察をしてみたい。

5. 「ぼっぼくらぶ」での取り組み

(1) 目的

就園前親子への音楽活動による支援という本実

践の特徴をふまえ、次の2つの目的を設定した。

- ①親子でクラシック音楽を聴き楽しむ。
- ②親子で動物に変身し音楽の流れに合わせて遊ぶ。

(2) ねらい

- ①「親子でクラシック音楽を聴き楽しむ」のねらい

多様な音楽が溢れ誰もが自由に選択し触れたり味わったりできる今日ではあるが、幼児期にどんな音楽に触れるかは、子どもを取り巻く大人の影響が大きい。子どもの音楽の嗜好や音楽的な感性は、メディアなどの環境と親の考えや保育環境などに左右されるといえよう。

多様な音楽のひとつにクラシック音楽があるが、クラシック音楽に触れることは幼児期の子どもの印象に深く刻まれるひとつとなると考える。クラシック音楽のなかには、子どもの感性に訴えかけるような魅力をもっている曲も少なくないことは誰しも認めるところであろう。このことをふまえるとき、幼児期にクラシック音楽を聴き味わう体験をすることは大切と考える。子どもが母親や父親と一緒に、初めて耳にするクラシック音楽を聴くとき、親の態度や反応に影響を受ける。親が楽しそうにあるいはうっとりとした様子で真剣に耳を傾け聴いている姿を間近に見たりすると、日常生活のなかで接している父母とは異なる姿に気が付き、自分は聴いたことのない音楽でも次第に一緒になってその音楽に聴き入るようになっていく。子どもがクラシック音楽を聴き味わうことができるようになるきっかけには、親の影響が少なくない。音楽を聴き味わうということも多くの子どもにとって大人の見よう見まねからスタートすると言っても過言ではないかもしれない。これらから、親子でクラシック音楽を聴き味わう体験は、貴重な時間になると考える。

- ②「親子で動物に変身し音楽の流れに合わせて遊ぶ」のねらい

幼児期の子どもを抱えた子育て真っ只中の父母は、日常生活の中でクラシック音楽を聴く時間を確保することがなかなか難しいのと同様に、子育て

てにおいて子どものために何かしてあげることが多いものの、父母自身が童心に返って子どもと同じような目線で遊ぶ機会はそれほど多くはない。

そこで、本実践のような企画を通して、親子で音楽に合わせて動物と一緒に変身したり、楽しく動いたりして遊ぶことは日常生活では経験することのない貴重な体験となる。子どもが楽しむことはもちろん、父母にも遊ぶ機会、楽しむ機会を提供することは大切である。音楽に合わせて音楽が表現している動物を上手に身体表現することができるということが目的ではなく、親子で変身し遊ぶことが目的であることを父母には知らせることが、活動を楽しいものにする。

(3) 対象者

次年度本学附属幼稚園に入園予定の子どもとその父母が集まり週1回活動を行っている「ぼっばくらぶ」の親子が対象である。火曜日クラスと金曜日クラスそれぞれの親子を対象とした。

(4) 使用した楽曲

用いた楽曲は、サン・サーンス作曲の《組曲動物の謝肉祭》である。この作品は、サン・サーンスの友人が主催する謝肉祭の最終日の音楽会のために二台のピアノと管弦楽の編成で、組曲として作曲されたもので14曲からなる。「自然科学を好んだサン・サーンスの鋭い観察力」²⁰⁾は、13匹のさまざまな動物の生態をユーモラスに、皮肉に描きだしており世代を超えて親しみやすい曲になっている。その中から、子どもが集中できる時間を考慮し、1曲がおおよそ4分ほどの次の3曲を選曲した。

『組曲動物の謝肉祭』より選択した曲

- ・白鳥
- ・亀
- ・象

選曲した曲は、火曜日クラスと金曜日クラスそれぞれ次のように用いることとした。

火曜日クラスと金曜日クラスの共通曲として、優雅で清らかな白鳥の姿が描き出された「白鳥」を使用する。火曜日クラスのもう一曲は、ベルリオーズの《ファウストの劫罰》の中の「空気の精の踊り」の旋律を用いたといわれている大きな象がワルツを踊る様子を表した「象」とする。金曜日クラスのもう一曲はオッフェンバックの《天国と地獄》から引用されたゆったりとした歩みの「亀」とする。

(5) 音楽活動の検証

参加者は、火曜日クラス、金曜日クラスともに10組前後の親子であった。最初にT氏と筆者がピアノ連弾で演奏している曲を親子で聴き楽しむ。その後学生有志が、表現されていたのは何の動物だったかをペープサートを用いてクイズのように語り掛ける。親子で動物の名前を当てる。何の動物の曲だったかが分かったところで、親子で一緒に動物に変身する。音楽に合わせて動物になったつもりで遊ぶというプロセスを踏むこととした。

①「親子でクラシック音楽を聴き楽しむ」について

子どもが集中できる時間を考慮し《組曲動物の謝肉祭》の中から、親しみやすく動物がイメージしやすい3曲を選曲したが、じっくり聴いたり楽曲に合わせて身体をゆすったりしながら曲全体に集中できている子どもと、集中が途切れがちなお子が見られた。今回用いたような楽曲を日常生活の中で落ち着いて聴くことは少ないと思われるので、すぐに全曲集中できなくても一部でも印象に残ったり身体に感じる瞬間があれば、今後につながるかと考える。音楽を聴き味わうということまではできなくても音楽を聴き何かを感じたり、想像したりすることの大切さを確認することができた。

父母は真剣に聴いていた方が多かった。幼児期の子どもを抱えている親は、日常生活では子育てに追われ、なかなかクラシック音楽を聴く時間を確保することは難しい。親子支援のひとつとして、父母自身が楽しく気持ちよく音楽を聴く時間を提

供することも大切な要素と考える。父母が多様な音楽ジャンルの一つであるクラシック音楽に興味と関心を持つことは、子どもがクラシック音楽に興味と関心を抱ききっかけともなるからである。

②「親子で動物に変身し音楽に合わせて遊ぶ」のねらいについて

子どもは変身遊びが大好きであり、時折行われる遊びであるが、父母と一緒に変身し遊ぶ機会は少ない。そこで、変身することによって遊びがより楽しくなることをふまえ、お面や衣装は子ども用と大人用のサイズを工夫し、それぞれを発達臨床学科の学生有志とともに製作した。「象」は大きな耳のお面とスズランテープで作った長い鼻を製作しお面を被って鼻を持って動くこととした。「亀」は親亀がオレンジで子亀がグリーンのビニール袋をサイズを考慮し裁断した。親子がそれぞれを着て親の背中に乗って遊ぶこととした。「白鳥」はきらきらした飾り用のモールでティアラを、白のビニール袋でつばさをイメージした衣装を製作し自由に踊ることとした。推測した通り、お面をかぶったり色鮮やかな衣装を着るなど、親子で変身の過程を楽しんでいる様子を見ることができた。親子で変身して遊んだ様子は次の写真の通りである。



写真1 お母さん亀と子亀の散歩

写真1は親亀に子亀がおんぶをして、散歩している遊びの様子である。本来なら親子で自由に動きを工夫し楽しんでもらうことができたらと考えていたのだが、なかなか自由に動くことは難しく、学生有志が一例の動きとして親亀の背中に子亀がくっついて一緒によちよち歩く見本を示したとこ

ろ、このようにおんぶする動きで遊ぶ様子が見られた。またおんぶが難しい親子の場合は、左端のように抱っこをして楽しんでいる様子が見られた。それぞれの親子の形で膚を触れ合い遊ぶ姿が見られた。



写真2 象さんのお鼻は長いよ

写真2は象の鼻が動いている様子を表しながら遊んでいる父母の動作を見て、子どもが真似ながら遊んでいる様子である。父母のほとんどは子どもの動きをリードしようとスズランテープを持った腕を大きく動かして象の鼻の動きを表していた。

本実践は、音楽に合わせてどのように動いたり遊んだりするかということよりも、変身して遊ぶことそのものを目的としたものなので、もし親子の動きに戸惑いがみられたときは、学生有志が動いてモデルを示すように準備をして臨んだ。音楽に合わせて自由に動くという動くことそのものに着目することは、就園前の子どもにとって難しいことを予測したが、学生有志による動きの支援や筆者の言葉かけがあることによって、スムーズな動きになることが示された。

就園前の子どもには、親は親で子どもは子どもでそれぞれに動き遊ぶ写真2の象の遊びは、親子が離れて遊ぶことも一因となって、子どもにとっては難しい動きの遊びであることが明らかとなった。写真1のように親子で身体を寄せ合い遊ぶ亀のような動きをもった遊びがふさわしいことが確認されたといえよう。

(6) 考察

親子でクラシック音楽を聴き楽しむことと、親子で動物に変身し音楽に合わせて遊ぶことを目的

に行った実践から、次の2つの成果が導かれた。

1) 幼児期に、親子で一緒にクラシック音楽を聴く時間を提供することは、子どもにとっても父母にとっても新鮮で印象深い時間を共有することになる。また、日常生活において子育てに追われている父母にとって、子どもと一緒に同じように変身したり動いたりしながら遊ぶ時間は楽しい時間となる。このようなプログラムを提供することはわずかではあるが精神的にゆとりの一時となる。これらから、就園前の親子が一緒にクラシック音楽を聴き楽しむ機会を提供することは、意義のあるひとつとなる可能性が示されたといえよう。

今後の課題として、音楽の選曲にあたっては、集中して楽しめるように配慮することと、提示の仕方の工夫が求められる。さらに、聴いた曲に合わせて動くという活動を取り入れる場合、動きのパターンをあらかじめ準備し適宜示したり、スタッフが親子の動きにアドバイスをしたり、音楽の流れに応じて「静かにお休みです」のような状態の言葉がけをすることも大切である。

2) 学生たちは、附属幼稚園での観察実習や、教育実習Ⅰ、Ⅱなどの体験をもとに、ディスカッションしながら変身用の衣装や小道具製作に取り組んだり、動きを考えたりする力が育っていることが確認できた。子どもにとって安全で身に付けやすい素材の検討や、サイズの工夫、ペーパーサートの準備などの製作技術はもとより、子どもが動物を想像しやすいように楽しく語りかけ集中させながら答えを導き出す技術、親子の間に入って動きを提案することで親子の動きを支援しようとする技術などがバランスよく育っていることは大学教育の取り組みが浸透していることと考える。

父母にとっても学生たちとのかかわりは、幼稚園教諭とは異なる身近に感じる存在であり、なごやかな雰囲気の中で一時を過ごすことができ、遊びの支援を受けやすい。このようなプログラムを通して、学生たちがてきぱきと動く姿や適切な支援をする姿に触れ、附属幼稚園や本大学教育に対する安心感、信頼感、評価も生まれてくると考える。

今後、本大学附属幼稚園の地域支援活動としてさらにどんな活動が可能であり、また必要とされるのかについて議論を重ねながら連携を深めていくことが大切であろう。

6. おわりに

本稿では大学附属幼稚園の役割について就園前の親子への支援の観点から音楽活動の可能性について考察し、一つの実践内容の検討を行った。実践の結果は、父母に書いてもらったコメントの内容のなかに「楽しかったので今後もこのような活動を取り入れてほしい」というものが多数あったことから、親子一緒に音楽を聴いたり、動物に変身して遊んだりする楽しさを味わう機会を提供することは、親子支援の役割として意義のあるひとつの活動となることがある程度確認されたように思われる。今後もこのようなプログラムが持続的に実践されていくよう推進していきたい。

我が国の幼児教育支援は、こども園や子ども手当の問題など依然として混迷を極めている。加えて隣近所や地域とのコミュニケーションが薄れてきていることから、子育ての環境が決して充実しているとは言い難い。若い父母にとって、子どもを育てることに不安や悩みを抱く場合も少なくない状況である。

それぞれの幼稚園や保育所は多様な支援活動を展開しているが、大学附属幼稚園としては、幼児教育の理念や根本を押さえた地域の子育て支援の指針となるような発信を積極的にしていくことも求められているのではないだろうか。

本大学附属幼稚園はまさにその責務を担っていると云っても過言ではないといえよう。今後ますます大学学部教育との連携を深め、実践研究を進めていくことが大切と考える。

(付記)

「ぼっぼくらぶ」で実践を進めるにあたって、発達臨床学科の熊谷彩香さん、齊藤佳奈子さん、渡辺理恵さんが準備や進行で活躍してくれた。また本学非常勤講師の高塚美奈子先生

には、ピアノ演奏の連弾で御支援をいただいた。そして「ぼっぼくらぶ」の企画運営を担当なされていた附属幼稚園教諭の色川幸子先生他スタッフの方々に、多大なる御協力をいただいた。心より感謝を申し上げたい。

注

- 1) 『子育て支援用語集』同文書院、2005、5.
 - 2) 立石陽子他「幼稚園における子育て支援の実態調査」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要2』2004、27-37.
 - 3) 畑山みさ子他「幼稚園が担う地域子育て支援のための方策の検討—未就園児のための親子教室「さくらんぼ広場」の実践から—」『宮城学院女子大学・同短期大学附属幼児教育研究所研究年報 6』1997、49-58.
 - 4) 畑山みさ子他「幼稚園が担う地域子育て支援方策の検討(2)—地域開放事業「さくらんぼ広場」2年目の実践から—」『宮城学院女子大学・同短期大学附属幼児教育研究所研究年報 7』1998、17-24.
 - 5) 畑山みさ子他「幼稚園が担う地域子育て支援方策の検討(3)—地域開放事業「さくらんぼ広場」3年目の実践報告—」『宮城学院女子大学・同短期大学附属幼児教育研究所研究年報 8』1999、25-30.
 - 6) 畑山みさ子他「幼稚園が担う地域子育て支援方策の検討(4)—1999年度宮城学院女子短期大学附属幼稚園地域開放事業「さくらんぼ広場」の実践報告—」『宮城学院女子大学・同短期大学附属幼児教育研究所研究年報 9』2000、59-62.
 - 7) 畑山みさ子他「幼稚園が担う地域子育て支援方策の検討(5)—2000年度宮城学院女子短期大学附属幼稚園地域開放事業「さくらんぼ広場」の実践報告—」『宮城学院女子大学発達科学研究 1』2001、71-75.
 - 8) 佐々木和他「幼稚園が担う子育て支援方策の検討(6)—未就園児親子通園クラス「ぼっぼくらぶ」初年度の実践中間報告—」『宮城学院女子大学発達科学研究 6』2006、93-101.
 - 9) 色川幸子他「幼稚園が担う子育て支援方策の検討(7)—未就園児親子通園クラス「ぼっぼくらぶ」2年目の実践報告—」『宮城学院女子大学発達科学研究 7』2007、55-62.
 - 10) 畑山みさ子他「幼稚園が担う子育て支援方策の検討(8)—宮城学院女子大学附属幼稚園の子育て支援の総括的報告—」『宮城学院女子大学発達科学研究 8』2008、81-90.
- 11) 雨天時の対応は異なっており、活動を中止するところと園庭の代わりに保育室を開放するところがある。
 - 12) <http://fu-youchi.miyakyo-i.ac.jp>
 - 13) <http://www.u-gakugei.ac.jp/~kinder/>
 - 14) http://k-onyo.sakura.ne.jp/o_garden.html
 - 15) <http://www.kg.akita-u.ac.jp/>
 - 16) <http://www/kinder.edu.saitama-u.ac.jp/>
 - 17) <http://www.seitoku.jp/kindergarten/fuzoku>
 - 18) <http://kumamoto-u.ac.jp/~kinder/>
 - 19) <http://www.ygk.ed.jp>
 - 20) 角倉一郎「組曲動物の謝肉祭」『名曲解説全集 5』音楽之友社、1980、122.